

七点

②退職の夜の一献や春の雨

柏尾のり子

四十七年間働いた主人が、三月末日で無事退職となりました。その夜は、尾頭つきの魚と小さなケーキでささやかにお祝いをしました。七十歳過ぎまで大きな病気もせず働いてくれ、仕事を全うできたことに少し胸が熱くなりました。乾杯した日本酒は一きわ深い味でした。

六点

②桜しべ音たてて降る終の家

柏尾のり子

先日、少し郊外にある老人ホームに、人を送った時の句です。今、話題のドラマ「やすらぎの郷」のような素敵なケアハウスでしたが、車の中で待っていると、風に吹かれて頭上の木から桜しべが雨のように降ってきました。車の天井におどろく程の音をたてて降ったことが印象深く俳句にしました。

五点

①解きかけのパズル投出す桜餅

佐渡谷秀一

新聞の土曜版に載るパズルのあれこれに挑戦していますが、昨年から熱中しているのが、連日掲載されている「数独」です。たちまち解けるものばかりでなく、やり直したり、途中で頓挫することありで、興味はつきません。

①この一樹吾が年々の花見どこ

桜井 幸枝

まさにそのまんまの句で具体的すぎて味わいに乏しく思ったのだが……。希望ヶ丘に移り住んで久しいがここ数年、特に気にかかっている。駅前Y邸の桜である。蕾がかすかに色づき始めた頃から盛りを過ぎて小さな葉が出てもお余韻を楽しませてくれる満開の桜は時間によって表情もかえてくれるのもうれしい。

未記入の臓器カードや四月尽

増田 守

国民健康保険被保険者証の裏面が、臓器提供の意思確認カードになっている。臓器提供の意味と必要性については十分理解しているが、毎年度の更新時に未だ踏み切れていない自分がいる。

きつぱりと免許返上風光る

藤本 友子

最近、高齢者の車運転事故が多発しています。この様な報道を見るにつけ、私達夫婦も少なからず不安に思っていました。この度、夫の免許更新に当たり、子供達からも強力な勧めがあり、最初は、渋っていた夫もようやく決心しました。それからは、気分一新、車に頼らない生活を工夫しています。「風光る」ですっきりとした

大揺れの桜が先に酔うてをり

恩田 才美

近隣の住宅地に伐採地があり、オオシマザクラの大本が一本残されている。四、五年前に発見して以来、朝夕に見に行き、「私の桜」となった。枝を大きく張り出し、地に迫る姿は小山のようで白とも青色とも或る寄り難い風格を匂い立たせている。踊りは踊り手が踊ることに痴れ酔うから見る側も楽しむように、花にもそれは言える。或る風の強い日、大きく揺れる桜大樹の前に、「この花は咲くことに心から酔っている。だから私も酔うのだ」と。

四点

③ 皺深きバスの日の丸みどりの日

増田 守

市営バスの前部に日の丸の旗が取り付けられている。倉庫から出されたままかどうか知らないが、皺がまだ残っていた。現天皇が生前退位を示唆されたことに、前天皇が心配されているようである。

② 八人の老人集ふ子供の日

平野 邦子

孫の初節句のお祝いに両家の祖父、祖母また曾祖母まで年寄りがおおせい集まり、賑やかな一日でした。

② 鳥雲にひとり長居のベンチかな

佐渡谷秀一

近くの公園の桜も葉っぱばかりとなると、ベンチの利用者は減少している。柔かい風に吹かれながら、樹の下でぼんやりしていたり、読書するのに悪くない。急ぎ帰る用は殆どないのである。

① 穂の芽や島の香りをほしいます

増田 守

この穂の芽は、式根島に住まわれている句友から送られて来たものである。宅急便の荷を解いたとき、閉じ込められていた強い香りが立ちのぼった。島に自生の、朝採りの穂の芽である。

音も無く足元すくふ春の波

藤崎安紀子

ダイヤモンドではないですが、今年は結婚四十五周年のサファイア婚で、記念に熱海へ出かけました。寛一お宮の銅像を見ながら熱海の海岸を散歩していた時、海浜公園の砂浜で、いきなり足元の砂がくずれてゆき、びつくり。波にさらわれたのですが、波といえばザブンと押し寄せてくるものとばかり思っていましたので、音無し春の波に、しばし見入ってしまいました。

断捨離と遠き暮らしや木の芽春

佐渡谷秀一

連合いが急逝してから十年程になるが、仮に本人が家に戻ってきてても、口に入るもの以外全てのものが元通りに鎮座しているのを見ることになる。(寿命のきた電気製品は新しくなってはいるが)二つある屋外の収納庫も満杯。庭の木は大きく育ち、庭師の来る前はジャングル状態となっていた。

惜春の情緒みたる八十路かな

桜井 幸枝

季節の変りめに感ずる思いは夫々である。冬から春へは何かホツとする感じだ。しかし春の終りは複雑で単に春を惜しむでもなく、そのころはとらえどころがなくむづかしい。過ぎ去った事など「もやーっ」といつまでも胸の中を占めて浮遊している。